

# 情報メディア科 作品紹介

今年度4月～8月までの作品を紹介します。地域貢献活動として年々、すばらしい作品が出来上がっています。来年3月発行の会報には9月以降の作品を紹介したいと考えています。ご期待下さい。



## なんがでつきよん

校長 夏目 由美子

夏休みの二日間、全国高等学校校美術工芸教育研究会に参加するため三十七度もある猛暑の中、香川県高松へと出かけた。来年度この大会を秋田で開催するに当たっての引継ぎを含めた視察と大会参加への宣伝目的であった。私としては高二的の修学旅行以来、四十一年ぶりの四国だった。

「きよん」(ごきげんよう!)と声をかければ、「なんちゃーでつきよらんよー」(変わりはないよ)との返事が日常的に交わされるのだ。秋田弁ならどうなるだろうか。と一生懸命考えてみたのだが、強いて挙げれば「まめであらあ」ということだろうか。やはり字数(じかず)はやや少ない。

大館、仙台。そして教員となり最初の鹿角をはじめ県内各地に赴任したおかげで、同じ秋田弁でもその土地独特のアクセントや意味のニュアンスの違いをしっかりと味わうことができた。そこへ行けばさすがに相手に合わせて話せると思うので、私は秋田弁バイリンガル(?)かもしれない。ただし、本校元PTA会長さんとの少しお酒が入ってからの正調象湯だけは半分しか聞き取れないが。



## 仁高フラガールの挑戦

月本 晴子

今年5月に、「フラガールズ甲子園」に出る高校生いますか? というメールが入りました。相手は、私のフラの恩師、菊地美栄子先生からです。由利本荘市(旧岩城町)と福島県いわき市は親子都市というところで、市の青年会議所から要請があったとのことでした。今年3月に卒業した、仁高保高校出身の安保里緒奈(西目中出身)が、スバリーゾトハワイアンズにダンサーとして就職したこともあり、仁高保高校からは是非参加者を出してほしいとのことでした。

今年、初めて「フラガールズ甲子園」に参加し、生徒を育てる上では素晴らしい機会だと実感することができました。復興支援はもちろんですが、大会までの様々な経験を積むことがとても有意義な体験だったと思います。そして、様々な地域の高校生との交流もできました。人見知りな仁高生でしたが、他校の生徒が声をかけてくれたり、写真と一緒に撮ったり、そして真剣にフラに取り組み姿勢を見て大変刺激になりました。

最初は基礎ステップから始めましたが、見たこともないフラを始めるといって、かなりぎこちないもので、でも、本人達は楽しかったようです。大会で踊るのは、課題曲(フラ)と自由曲(タヒチアンダンス)のオテアII 歌詞の入らない打楽器のみのリズムカルな曲です。課題曲は2曲から選ぶのですが、4人でDVDをみて、難しいけれどもかわいらしい「ラブリィフラハズ」に即決。自由曲はサンブル曲の中から選び、基本ステップ5種類を入れながらの創作ダンスで、振り付けが完成するまでかなり時間がかかりました。そして、楽しくも本人達にとってはつらい練習が始まりました。なせ、タヒチアンのステップを1曲踊るたびに、ゼイゼイ息を切らし、座り込んでいたのです。それが大会直前は、涼しい顔で3曲は踊り続けられるよう



先輩フラガール安保里緒奈さんと



舟木君子さんと

衣装・髪飾りは手作りです。

になりまして。若いわって素晴らしいです。また、経験を積むために地元のフラダンス教室の生徒さんに混ぜてもらって、様々な地域のお祭りで踊らせてもらったり、ありがたいことに地元新聞に記事が載ったから、お祭りや福祉施設にも呼んでいただきました。ステージでうまく踊れなかったり笑いながら、それがあってこそ本番に臨めるのだと励まし、彼女たちもかなりたくましく成長しました。始めて間もない頃、ヘアスタイルを「おでこ出すとか、無理」と言っていた彼女達、今は真剣な表情でメイクをスチレージに臨みます。私が練習に顔を出すまで、ただ座ってしゃべっていたのが、自分たちで踊りを確認したり、「先生、ちゃんと踊れてましたか?」と確認に來たり、何より、ステージで周りの人々を楽しませようと、精一杯の笑顔で踊れるようになったのは本当に驚きました。

さて、大会当日、直前まで踊りを確認しながら19番目という順番を待っていると、突然美しい女性が、楽屋を訪ねてきてくださいました。象湯出身のフラガール「舟木君子さん」でした。若い頃、友人を訪ねて福島に來たときに、フラに魅せられそのままフラダンサーになり、当時親から勘当されたとおっしゃっていました。舟木さんは、前日のリハサルで仁高保高校参加